

高橋/高岡外しに見る日本の組織

マラソンの代表選考で高橋尚子が落選した。新聞報道では、10名の専門委員会で高橋を支持したのは小掛副会長一人だという。それに続く理事会・評議会ではほとんど議論のないまま、この原案が承認された。陸連の増田明美や山下佐和子の両理事はこの決定を基準に則ったもので、当然だという。

しかし、良く見ると、男子と女子では異なる論理が適用されている。男子の油谷は過去の実績で選ばれ、女子の土佐は選考対象レースのタイムで選ばれた。この二人が第二番手で選出されたことで、事実上、男子の高岡寿成と女子の高橋尚子がリストから外された。どうして男女で異なる論理が適用されたのだろうか。そのことに理事は何も疑問を感じなかったのだろうか。陸連はこの論理の不明瞭さを十分に説明していない。

油谷の選出は基準の濫用

女子の高橋の選出だけがクローズアップされているが、男子の選出も論理的に一貫していない。選考基準は簡単な二つの文言からなっている。一つは、「2003年の世界選手権の日本人最上位者でメダリストを内定者」とする規定であり、今一つは「各選考協議会の日本人上位競技者の中から本大会でメダル獲得または入賞が期待される競技者」という規定である。

女子の野口は銀メダルで日本人最上位者ということで内定を得たが、5位で2時間9分26秒だった油谷は内定を得ることができなかった。この大会で3位になった千葉真子は内定を得られなかったために大阪国際にも出場し、坂本に次いで2位に入った。しかし、油谷は以後の選考レースを見送り、選考委員会の決定を待った。

ところが、専門委員会は男子の二番手に油谷を推した。これは、事実上、油谷の世界陸上成績に事後的な内定を出したに等しい。世界陸上の順位とタイムから見れば、この決定は明らかに選考基準の逸脱である。油谷の選出は選考基

準から逸脱したものだ。もし千葉が大阪を走らないで、油谷と同様に選考委員会の判断を待っていたとしたら、千葉を選考しただろうか。そのことを考えれば、明らかに、油谷にたいする専門委員の思い入れがなければ、二番手での選考は考えられない。

「過去の実績」なら何故高岡を選ばない

男子の高岡は近年にない大器であり、世界のスターだ。長距離の日本記録をすべて保持し、シカゴマラソンで日本記録（2時間6分16秒）をたたき出した実力者だ。福岡で不覚をとったとはいえ、国近との差は7秒、諏訪との差は4秒だ。この程度の差なら、それこそ「過去の実績」でお釣りが来るではないか。

ところが、専門委員会は2時間9分26秒の油谷を夏に強い、勝負強いと「過去の実績」（世界選手権連続5位）で選んだのである。この論理は誰が見ても分かりづらい。最初から、高岡は勝負に弱く、油谷は勝負に強いという先入観が働いている。しかし、油谷に世界のトップランナーと、5分台から6分台のデッドヒートの経験があっただろうか。

油谷の選考待機戦術は、どう考えても、専門委員の思い入れか、暗黙の内定なしに理解不能なものである。

トップと二番手の差

昨年8月の世界陸上の女子マラソンを見られた人も多だろう。野口、千葉、坂本の日本人3選手とケニアのヌデレヴァとの一騎打ちだった。言うまでもなく、ヌデレヴァは2時間20分を切るタイムを持つ実力者だ。このレースはスローペースで始まり、30キロ過ぎてからヌデレヴァがスパートする展開になった。

野口は最後まで懸命に追いかけたが、坂本と千葉はみるみるうちに後景に追いやられた。野口がいくら頑張っても、ヌデレヴァの柔らかい走りに太刀打ちできないことは、誰の目にも明らかだった。

要するに、2時間20分を切る力をもつ選手と、そうでない選手との間には、埋めることできない差がある。これをまざまざと見せてくれたのが、昨年の世界選手権である。やっぱり高橋でないと勝負にならないのかと実感させた大会である。もっとも、野口や坂本はまだ若いから、急激に伸びる余地を残しているが、あの大会からまだ僅かに半年しか経っていないのだ。

スポーツの世界であれ、芸術の世界であれ、世界のトップと二番手のクラスでは、誰が見ても否定できない差がある。この差を埋めるのは並大抵のことではない。もちろん、トップとはいえ、常時万全の状態にあるわけではないから、時には失敗もする。しかし、やっぱり「物が違う」というのは否定できない。どう見ても、現在の坂本や土佐に高橋の代わりはできない。

天才を否定する日本社会

「層が厚いから誰が出てもメダルに届く」というのは、綺麗事の話。高岡や高橋のような天才ランナーは、10年に1人出るか出ないかの逸材だ。その彼らを、天分に合ったように処遇できないところが、いかにも日本的だ。突出している天才を扱うことが苦手な日本社会の特質が、陸連の組織にも当てはまる。

土佐を二番手に推した理由が可笑しい。選考レースで最高タイムだったから、無条件に選ばれたという。だって、異なる選考レースのタイムを並べて、上から順に選ぶなどどこにも書いてない。そもそも、気象条件やコース条件の違うレース結果を比較するからこそ、専門委員の判定が必要なはずではないか。もし単純にタイムを並べるのだったら、何も専門家の裁定を仰ぐ必要はない。ところが、専門委員会は素人のような「非専門的」で、基準に書いてない論理で、土佐を二番手に推した。

明らかに、前日の名古屋女子マラソンでの土佐の頑張りが、この決定に影響した。しかし、頭を冷やして良く考えて見ればよい。土佐が逆転したのは高橋尚子ではなく、自己ベスト28分台の無名の田中選手だ。これを「涙の逆転劇」

というのはあまりにオーバー。土佐をコーチしている鈴木監督にいたっては、「これだけ頑張っただけ選ばなければ、なにをすれば良いというのか」と、まるで浪花節だ。この程度の意識の監督に、世界の舞台が務まるか。

最高の気象条件で、目一杯に走って24分を僅かに切るタイムは、誰が見ても世界で通用しない。それを選考レース「最高タイム」と一押しする専門委員は、いったい本当に専門家なのだろうか。「最高タイム」の選手を落とせば、世間からどんな非難が寄せられるか分からないと考えたのだろうか。その程度の説明をできないほど、専門委員会は無能なのだろうか。この時点で、専門委員会は専門家であることを止めた。

嫉妬が渦巻く陸上界

小出監督の言動を快く思っていない専門委員も多いだろう。陸連にポストをもっていないとはいえ、小出監督は一国一城の名匠だ。陸連の専門委員が口だしできる立場にない。その彼が専門委員の立場をないがしろにするような言動を繰り返していれば、「一泡吹かせてやろう」と考える人もいるはず。こうした感情に火を付け、勢いをつけたのは、やっぱり「涙の逆転劇」だろう。論理ではなく、感情が優先される日本の特性が一挙に勢いを得た。それを後押ししたのが、「選考レース最高タイム」というナンセンスである。

意外だったのが、専門委員10名の見解である。高橋支持が1名というのは、どう考えてもおかしい。「実力者」小掛副会長へ反旗をひるがえすという陸連内部のパワーポリティックスが働いたのだろうか。

理事会・評議会でも議論なしに原案が可決されたという。これも日本的だ。上の人が決めたことだから、意見は言えないのか。それとも、本当に専門委員会の決定に納得したのか。それにしても、誰も男女の選考論理の恣意性を質さなかったとしたら、それはこの組織が形骸化されている証左だろう。

2004年3月

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)